

# 大陸(満州)

## 私の軍隊生活(その一)

愛知県 河村 廣 康

昭和十八(一九四三)年四月二十五日・二十六日、鷹来村(現春日井市の一部)と味噌村(現小牧市の一部)の二カ村の徴兵検査が始まった。十日前に通知書を受け取った。当時のメモ帳には「徴兵検査の通知書を受け取ったときの嬉しさ、いよいよ俺も成人となるのだ。そして立派な兵隊となりお国のために尽くすことができるのだ」という感激と同時に、もし現役に通らなかったら、召集令状を待つより仕方がないがそのときはどうしようか、などと心配したものだ」とある。

鷹来国民学校へ午前七時に行く。村役場の兵事係よりいろいろと注意があった後、学科試験があった。あまり難しい問題はなかった。午後から小牧中学校(今の県立小牧高等学校)で体力検査があった。胸部のレントゲン検査を済ますと、俵かつぎと俵さしをした。俵さしは一回もできなかった。俵さしとは、重さ十六貫(六〇キロ)の米俵を両手で持ち上げそのまま腕をぐっと上に延ばし、俵を頭上高く掲げることだ。

明日は兵種の決まる日だ。今晚はゆっくり休もうと早くから寢床に入ったがなかなか寝付けない。なんとか合格したい。そして海でも陸でも、南の果ても北の果てもかまわない。合格したい気持ちがいっぱいで、夜中の十二時も午前二時も柱時計の音を聞いたほどだった。朝五時に起きて自転車に乗り、友達と

道々「お前は甲種だ」「いや、俺は第一乙種かもしれない」などと話をして小牧中学校に向かった。

午前八時から始まる。下士官から検査場内の説明があつてから、徴兵官の訓示があつた。「この徴兵検査は諸君の成人式であり、ご奉公の一つであるから、厳正を終始一貫してもらいたい」。

第一番 胸囲・身長・股下・体重(五一、五キロ)、

第二番・第三番 視力・目の検査、

第四番 耳鼻咽喉・聴力・関節運動、

第五番 内臓・陰部・一般の検査、

第六番 身上・学力調査、第七番 兵種決定、

という順序で進められました。第六番と第七番は、徴兵官、名古屋連隊区司令官代理 陸軍大佐 江本某との問答の中で進められました。

「十八番、河村廣康」検査番号と姓名を言う。「うん」と言つて青年学校手帳を見られ、「青年学校はよく出たな、大変よろしい」とにこにこされた。「君はどこに勤めているのかね」「ハイ、名古屋陸軍造兵廠、鷹来製造所であります」「どんな仕事をしておるかね」

「ハイ、<sup>あつ</sup>庄伸であります」「庄伸とは、どんなことをするのかね」「ハイ、弾丸の被甲<sup>びこう</sup>を伸ばすのです」

徴兵官は紙切れを見ながら、「体力検査は受けておるようだが、何に通つたね」「ハイ、通りませんでした」「何が不可なんだか」「手榴弾投げと思ひます」「昨日の俵指しは何回上げたか」「ハイ、一回もありません」「そうか、そんなことではいかんな。銃剣術はやつておるか」「ハイ、造兵廠へ入つてからはあまりやりません」「工場は月に何回休みがあるかね」「ハイ、三回くらいであります、それも夜勤明けです」「ふーんそうか、そうすると学校へ行つてやることもできないわけだな」「ハイ、そうであります」「うんよし、第一乙種、合格」「第一乙種合格、河村廣康」と復唱して徴兵官の前から下がり、村役場の兵事係に報告する。

全員の兵種が決定された後、徴兵医務官・徴兵官の訓示があつた。現役兵になる者、補充兵になる者、国民兵になる者のそれぞれに注意を与えられて午後六時に終わった。

通常であると現役兵になる者は甲種合格者ですが、昭和十八年と言えば大東亜戦争の真っ只中ですから、第一乙種合格者も現役兵になっていました。

家に帰って父母に「第一乙種になった。現役でも兵隊に行ける」と勇んで報告しました。父はそれを聞いて苦笑いし「よかったな」と言った。母は何も言わず私の顔を放心したように見た。その時の両親の心なしか寂しそうな姿が、いまだに臉の裏に焼き付いています。

四人の子供を産み三人を若死にさせて、残った一人を兵隊にやる。今は大戦の最中で戦場に赴くのは決定的な時、さながら戦死と言うことも頭に浮かぶ。本人の私は現役で入隊できると意気込んでいるその反面、親はお国のためとは言いながら、どこへも持って行き場もないやりきれない思いで胸の内はいっぱいだと感じ取りました。

六十の坂を越して二人の孫を抱え（兄夫婦は死亡）、六反半（一九五〇坪）を耕作するのは大変なことだ、くらいに思っていた私は、父母の胸の内を推し計り大

きなショックを受けて、複雑な思いに心は沈んでゆきました。

入隊までのこと

甲種・第一乙種の合格した者は、戦時下の入隊だから誰もが生きて還ることは考えていなかった。旧鷹来村（牛山町・大手町・田楽町・桃山町・西山町・岩野町）の合格者三十四人は、合格祝の会を小牧市の「大丸」という料理旅館で開いた。芸者も呼んでドンチャン騒ぎ、「オイ、今度会うときは靖国神社だ」「お互い頑張ろう」と励まし合って別れました。

現役で入隊と決まった以上覚えておかなければならぬことがたくさんある。「戦陣訓」「軍人勅諭」「歩兵操典」など（私は学科試験のとき志望欄に、第一志望に通信手、第二志望に歩兵と書きましたから）ちょっとやそっとでは覚えることができない。二宮金次郎ではないが勤めの行き帰り、仕事中でも隙を見ては頭の中にたたき込むようにしました。

田圃の野良仕事も今年限りと思い、夜勤明けの疲れ

た体に鞭打って父母の手助けも一生懸命いたしました。

当時私は痔を患っていましたから、鳥居松製造所内の病院で手術しました。また、ずーっと胃が弱く毛糸の腹巻をしていましたが、腹巻なしの習慣も身につけました。身の回りもきちんと整理して後顧の憂いがないようにして、入隊の通知のくるのを、今か今かと待っていました。

## 入 隊

昭和十九年一月二十三日 天気 晴

寒い朝です。家の入り口を背にして、国民服に奉公袋を手に前庭に立つ。間内部落の人達が繰出で見送りに集まって来てくれている。町内会長さんの入隊祝の挨拶があった後、「皆さん、おはようございます。年老いた父や母それに小さいかずよと忍を残して行きませんが、どうかよろしくお頼み致します。大東亜戦争の最中ですから生きて再びこの家に帰れるとは思っておりません。日本男子としての名譽のためにも、草むす

屍、水漬く屍となっても国を守る覚悟です。朝早くから見送っていただき有り難うございました。後に残る者は皆さんのお世話様になります。どうぞくれぐれもよろしくお願い申し上げます」と挨拶して家を後にしました。

前夜は「いよいよ明日は入隊のため家を出ることになる。どうせ生きて戻ることは無いと心に決めている。物心付いてから今までのことが走馬灯のように頭の中を駆け巡る。また父や母が、四人の子を産みながら既に三人が病死して、最後に残った私を兵隊に送り出す気持を思う。また年老いて二人の孫を抱え野良仕事をして行くこれからの暮らしに思いを巡らして、胸が締め付けられ、殆ど眠ることができなかった」と記した。

そんなことを頭に浮かべながら、皿屋敷・郷中・新外を経て春日井の前並部落に着いた。鷹来村のその日の入隊者五人が合流する。村長さんの挨拶を受け、全村民の見送りを受けて名古屋に向かう。私は父や親戚の者と親しい友達とで熱田神宮に行き、武運長久を祈

願した。

私だけが入隊の都合で、一口家に引返しました。昨夜は殆ど寝ていなかったけれども今夜も眠れそうになり。遅くまで両親といろいろ話をして過ごしたが、辛くてまともに顔を見て話せなかった。父や母は「後のことは何とかやっついていってから心配するな。死ぬなよ、生きて帰ってきてくれ」と言う。

一月二十四日 晴

東の山の端が少し明るくなってきたころ、満天降るような明け方の星を仰いでわが家を出る。庭まで出て見送ってくれた母の頬は涙で濡れていた。「昨夜もよう言ったが、どうぞ生きて帰ってくれるよう毎日祈っているから、元氣を出していけよ。後のことは心配せんでもええ。いつまでもお前の帰りを四人で待っているからな」の声を後に、父と新田の叔父、本家の伯父と三人で勝川駅まで歩く。汽車に乗り名古屋駅に着く。駅で受付があつて、入隊先別に分けられた。午前八時少し過ぎ列車に乗り込む。ホームに上がる階段の

下にいた父たちがどっと駆け上がった。発車、汽車はゆっくりと動き出した。

「廣康、生き帰ってこい」日頃気丈な父が日に焼けて赤銅色の頬に幾筋もの涙を流しながら大きな声で叫び、私が顔を出している窓に近寄ってきた。「おとっさん、有り難う。大変じゃが留守を頼むよ」父は汽車の速度が速くなり窓からどんどん離れてゆく。「後は心配せんでもええ、とにかく生きて帰ってきてくれ」私は父の姿が見えなくなるまで略帽を振り続けた。

私達の列車が通過するのを、近くや遠くで見送っている人達。声は聞こえませんが両手を高く振りながら、万歳、万歳と叫んでいる。大阪駅で下車。指定されている宿に泊まる。一月というのに火鉢もなく、寒くて震え明かした。

一月二十五日 晴

中部二十二部隊（元歩兵第八連隊）に入隊。営庭で県別に整列する。正面中央に「いくさ」と記した腕章

をつけた将校が祝辞を述べた後、身体検査のため衛生係の将校に引率されて医務室に行く。検査が済むと通信中隊と書かれた看板の建物の中に入れられました。

二階に上げられるとすぐ新品の軍服が渡された。上から下までピカピカの一年生ならぬ一つ星の陸軍二等兵ができあがった。やっぱり軍服を着るとシャンとする。再び引率されて酒保の二階に上げられた。いやー驚いた。すし詰めの状態で「辛抱せよ」という。ここがしばしの寝泊まりする所となった。

夕方になり初めて軍隊食を食べた。主食は米と麦と大豆、副食は大根のぶった切りに烏賊の煮込んだもの。食べた後どうも腹の調子が悪いと思っていいたらなんのことはない、夜明け前に便所へ飛び込むことになった。軍隊では便所とは言いません。廁かわと言います。「河村二等兵、廁に行つて来ます」という具合に。腹がすっきりして寝込んだところに「オキロヨオキロ、ミナオキロー オキナイトハンチョウサンニ、シカラレルー」の起床ラッパが鳴り響く。

兵舎前に整理。点呼朝礼、体操、食事、教練とな

り、昼食の後また教練と日課は過ぎて行きます。三十人ずつのグループで二個の内務班が編成され、班長には「いくさ」の腕章をつけた軍曹、助手には召集兵の兵長と上等兵。

二月五日

この大阪の二十二部隊におること十一日間。昨日「明日は原隊のある満州に出発する」と知らされた。

原隊名は「満州第一九三部隊」という。「いくさ」の腕章は一九三はいくさと呼べるから、なるほどと思つた。午前十時、隊列を整え宮門を出る。臨時編成の中隊順に新兵九百人は晴の門出の一步を踏み出した。

歌の文句じゃないけれど『歓呼の声に送られて、今ぞ出で立つ父母の国』。父や母の住む故郷、友達がいっぱいいる古里、毎日眺め暮らし遊んだ川や田圃、生まれて育つた日本。いよいよ今日さよならになるのだ。

未練とは思われたが、二度と再び父母の顔を見ることもないだろう、声も聞くことができないうらさう。今

日を最後に本当にきよならだ。「いつまでも元気に暮らしてくれ」と心の中で祈りながら。

営門を出た途端、突然、本当に突然「ひろやす！」と必死と思える大きな声が耳に飛び込んで来た。ハッと声が出た方を振り向くと人込みの中に、私の顔を見たりれしきか涙で顔がクシャクシャになった父がいた。まさしく父がいた。途端、思わず涙が出てきて父の顔がぼやけてしまった。

父は今日、満州に出発するのをどうして知ったのか。今日のこの日を。我が子、我が兄弟など見送ろうと肉親の人達が歩道狭しと、思い思いの目印の旗などと打ち振りながら血眼になって探している。その中から私のそば近くまで飛び出して来た父。私も思わず隊列を離れようとした程です。私の横で少しの間隔を置いて歩く父、胸がつまって言葉がなかなか出てこない。日に焼けた皺だらけの顔に、今日を最後と会えた喜びの涙の目を向けながら「元気で行け」そして「何でもいから元気で帰ってこい」と励ましてくれた。「うん、分かった。元気で行くよ。おっかあにも言ってく

れ……。おっとうもおっかあも体に気をつけて元気でいてくれよ。向こうに着いたらすぐ手紙を出すし、できるだけ出すようにするからな」引率の将校の思いやりか、大阪駅に着く前に小休止があった。

父は昨日の夜、小牧の春日寺の蝦原さんから「明日の朝大阪を発つ」と、わざわざ知らせてくれたとの事。彼は何かのついで知っただろう。母はこの知らせを聞いて、夜も寝ずに私の好きなポタモチと弁当を作ってくれ、父は夜中に南外山の菓子屋をたき起こし買物をして、昨夜一睡もせず夜汽車に乗って来たという。ポタモチを一口に入れた。父や母の熱い思いが頬を濡らす。せっかくのポタモチのほとんど弁当は入れるところがなく父に返し、キャラメルと飴玉を雑糞に入れる。こういう切羽詰まったときはなぜか言葉が出ない。十五分の休憩は瞬く間に過ぎた。父は駅までついて来てくれたが、駅は物凄い混雑でいつの間にか見失ってしまった。軍用列車は万歳、万歳の声にこたえながら一路、西へ西へと走る。

翌六日早朝、博多駅に着く。下車したらすぐに港に

向かった。港に着いたら小休止もなく乗船。ポーッと汽笛一声輸送船は岸壁を離れた。甲板は鈴なりだ。

玄界灘は荒れていた。船は前後左右に揺れ船酔いしてしまふ。八時間で朝鮮の釜山港に接岸。夕方、上陸したあと初めて、小銃に銃剣をつけて歩哨に立つ。皆は列車の中に入っている。夜の港のホームはガランとしていて薄暗くあまり気持ちのいいものではない。夜空に輝く星を眺めながら、寒さも一段と厳しいのに「異国だなあ」と思う。列車は内地と違って馬鹿でかく、まるで監獄列車のようだと、なんとなく思う。夜中に発車。朝方、ある駅でプラットフォームに出て体操をしたとき、「ウッ、寒いなあ」と感じた。それで風邪をひいたのか、熱も出て食事もまずくて食べられない。外の風景は、禿げ山と屋根の反り返った民家の連続だ。肥え壺を背負った農夫の姿も見える。饅頭型の小さな美しい丘は墓だという。国境の豆満江は厚い氷に閉ざされて、氷の切り出しが見えた。満州は密林が多いと聞いていたが、見渡す限り平野で山が見えない。もっと奥地に行けばいくらでも見えると言う。

目的地の勃利に着いたのは二月十二日の昼頃だった。風邪熱でポーッとした目で辺りを見る。「なあんだ、本当に小さな田舎町だな」と感じた。ちょうど盆地になっていて周囲の山々も野も茶と雪の白さで塗つぶざれている。寒さは厳しいようだが雪はあまり積もっていない。目指す一九三部隊まで二里と聞く。「零下三〇度はあるな」と引率の将校が言ったが、熱のためか少しも寒さを感じない。体がきつくて苦しくて、ただふらふらになって引きずられるようにして付いて行つた。兵舎と言えば二階建ての建物だと思つていたから、そんな建物は見当らない。部隊の周囲は土手によって区切られ、営門は二本の柱が立っているのみで、衛兵所は板屋根の仮小屋。営庭は物凄く広い、前方が霞むくらいだ。

## 入 院

兵舎はと見たがそれらしい建物は無く、半分ほど土で覆つた小窓をつけた倉庫らしき建物がズラッと並んで煙突から煙を吐いている。これが兵舎だ。営庭で

中隊ごとに分かれ、私は第一中隊第二班に配属。兵舎内に連れて行かれたが高熱のため、ボーッとなくなっていました。旅装を解くのに戦友さん（私の床の両側の古兵さんのこと）が手伝ってくれて、そのまま床に寝かされて衛生兵が来て検温三九度三分。薬を飲まされた。

翌日、隊内の医務室に入室、内務係准尉が来て「しっかりせい」と元気づけられたが駄目だ。その翌日の二月十四日、中隊長車（オンボロのガタガタ）に乗せられて、勃利の陸軍病院に入院させられた。軍医が急性肺炎と診断した結果である。一週間過ぎたら平熱になったが、一カ月間入院生活を送る軽患者になっから病室の廊下の掃除の楽な作業をさせられました。

軍隊に入っすぐ病気で入院とは、我ながら情けない思いをしました。早く元気になって軍務に励み国に尽くしたい。病院で、岐阜県郡上八幡出身の二年兵で高垣一等兵に会った。気安く話しかけたというので初めて気合（ビンタ）を入れられました。

退院して原隊復帰を命ぜられたときは嬉しかった。これで皆と一緒に軍務に励むことができる。

## 起 床

午前六時「オキロヨオキロ、ミナオキロー、オキナイト、ハンチョウサンニシカラレルー」と鳴り響く起床ラッパに起こされる。床の毛布たたみに一苦労。両側の戦友のうち一人は、いかつい顔をしているが思いやりのある二年兵で、自分のことは自分でやってくれるから大助かりだが、もう一人は関特演（関東特別大演習）で応召された兵隊さんで、炊事係勤務で起きぬけのままの状態だから、自分と戦友の二人分を整頓をしなければならぬから大忙しである。

他の新兵たちは自分のものを整頓したら、点数稼ぎに下士官室の整頓に走るが、自分は一度も下士官室に行くことはできなかった。

## 点 呼

自分のいる第二班の班長は秋庭軍曹と言います。こ

の人は「第一九三部隊に鬼軍曹あり」と鳴り響いている。いつも一杯飲んでいるような赤ら顔、精悍ないかつい面構えで、朝の点呼には必ず竹刀をもっている。自分たち兵隊は紫色したうがい薬の入った瓶に紙の蓋をしたものを持って、零下三〇度前後もしている兵舎前に整列します。点呼・体操・うがいをします。その後班長が、歩兵操典の中からの質問をする。これに答えられないと竹刀でポカリとくる。朝の点呼は日課の始まりですから案外簡単に済みます。点呼が終わると初年兵にとっては、てんやわんやの戦場になりました。

#### 朝食の前後

朝の点呼が終わると大変。四十人の内務班で働くのは初年兵の十一人のみ。そのうち三人は飯上げで炊事場に朝食を受け取りに行く。一人は便所掃除。二人は班内で食卓になる机を拭いて食器を並べるなど食事の準備。残った五人で班内の掃除と小銃の手入れ（銃の埃を払う）。歌の文句ではないが、てんてこ舞いの忙しさです。二年兵の初年係上等兵が、ガミガミ怒鳴

る。食事準備ができると、先任者（班内の兵長）に、「食事準備終わりました」と報告「ヨシ、食事始め」。二年兵以上は話をしながらゆっくりと食っているが、初年兵は食事の早い事、みそ汁を飯にぶっかけて噛むのではなく飲み込んでしまう。三分とかからない。自分の食器は素早く洗い、古兵たちの食事が早く終わってくれないかと待つ。古兵のなかには、自分も初年兵の辛さを経験しているから、早く済ませてくれる者もいるが、三年兵の一等兵ときたらねちねちが多くてわざとと思うくらい遅く、意地悪をする。

初年兵は教練に出るまでの限られた時間内に、下士官室の食器の取り下げ、食缶返納、再度班内の掃除、教練に出る準備など目の回る位に忙しいのです。

食事準備で難しいのが飯の盛り方、下士官・古年兵には盛り過ぎてても不可なし、いくらベタベタ飯でもうまくさばいて、ふんわりと盛らなければならない。

下士官室に持って行く分は膳の向け方・食器の置き方・飯の盛り方・お茶の熱さ加減など細かい注意がある。食器を洗って初年兵係に員数検査を受けるが、古

兵のいじめで食器を隠されて、員数が合わなくて幾度となく泣かされました。

食事のことでは、こんなことがどこの班でもありました。初年兵は、朝起きて夜寝るまでは体を休める時とてないのですから腹が減ります。飯盛りのときの楽しみは、食缶に焦げ飯がどれほど入っているかです。焦げ飯は初年兵の特権です。今ですと、とても食えないような焦げ飯がたくさん入っていると、自分たちの目がほころびました。

食事が終わり食缶を洗って、週番上等兵に引率されて炊事場に返納に行きます。出入口に食缶をおいて帰りかけますと「コラッ！ 第一中隊マテッ！」。きれいに洗ったつもりの食缶に一粒の飯がついていた「貴様ら、これでも洗ってきたか、みんな並んで尻を出せ」とくる。そもそも炊事係という者は、中隊で嫌われ者の荒くれ者がなっています。大きな釜から土掘り用のスコップで飯をすくいますが、そのスコップを持って二、三人の炊事係が駆けてきて、力いっぱいひっぱたきます。痛いこと、頭のとっぺんまでピーン

と響き、くらくらします。炊事場は鬼門でした。

いつも班長に叱られたり怒られたりしている兵隊の中には、こんなことがよくありました。下士官室に食事を運ぶときは食膳に息が掛からぬようマスクをして目の上に拵げて持って行きますが、それ以前に汚いことが行われていました。下士官の飯の上に坊主頭をカリカリとかいてフケを落して持って行ったり、蠅を細かく刻んでみそ汁の中に入れてたりしてほくそ笑み、空になって戻ってきた食器に「今日の班長の飯は一段と旨かったろう」と言って日頃の恨みを晴らしていた兵も事実いました。

### 教 練

朝の食事が終わると、初年兵は食缶返納・下士官室の掃除・班内の掃除などで、キリキリ舞いをしていると、演習整列準備の音が聞こえてくる。巻脚絆を巻くのもそこそこに装具を着けて舎前に飛び出します。鬼の班長が「初年兵、遅いっ！ 朝から何をもたもたしとる！」と怒鳴る。

第一九三部隊は機甲師団の歩兵部隊です。歩兵は走ったり、伏せたりとの連続ですから疲れること甚だしい。機械化部隊ですから演習場までトラックで行きます。二月といえは厳寒期です。零下三〇度はざらです。零下四〇度位の時もあります。日本では想像もできない寒さです。いくら走っても、転がっても体が温かくならず呼吸だけが息苦しくなるのです。「小休止十五分」となっても、ドッコイショと雪の上に腰を下ろすわけにいきません。冷たいというか、痺れるというか、とにかくジツとしていると寒くて仕方がないので。それで、きつとも駆け足をしながら手をこすりたり、凍傷にならないために白くなっている鼻の頭を叩いたり、耳を叩いたりしています。タバコを吸うのも駆け足の状態です。

鼻の頭を叩くということは、日本では冷たいと鼻の頭をこすりますね。しかし酷寒という満州では、そんなことをすると鼻の頭の皮がツルリと剥けてしまいます。ですから叩いて血行をよくして凍傷を防ぐのです。小休止の有り難いことは、叱られたり、怒鳴られ

たり、こづかれたりされなかったことです。慣れないところは、教練を終わりに隊に帰るときには疲れてふらふらになっていました。

「不動の姿勢は軍人基本の姿勢なり。故に常に軍人精神内に充溢し外敵肅端正なざるべからず」これが「歩兵操典」にあります。軍人はまず、完全な不動の姿勢がとれなければなりません。新兵は入隊早々から「気をつけッ！」の号令で、何十回、何百回となくこの姿勢をとらされます。「腹を引っ込めろ」「もつと顎をひけ」「もつと手をしっかり延ばせ」という具合でたかが不動の姿勢ぐらいと見くびっていると、とんでもないことになります。「両踵を一線上にそろえてつけ、両足は約六十度に開いてひとしく外に向け、両踵は凝らずして延ばし、上体を正しく腰の上に落ち着け、背を伸ばし、両肩をやや後ろに引き、両手は真つすぐに延ばし、手の中指はおおむね袴の縫い目に当て、頭を真つすぐに保ち、口を閉じ眼を正しく開き前方を直視す」このように典範令に書かれています。まことに複雑で頭が痛くなります。しかし、したい

に慣れてきますと「気をつけ！」の号令で、ピシッと苦もなくできるようになります。訓練とは恐ろしいものです。古参兵の意地の悪いのが「オイッ！ちよっと来い」と呼び付け「不動の姿勢の要領を言うてみよ」「ハイッ」と典範令に書いてあることを言うのですが、なかなかきちんと言えません。そこで、あでもない、こうでもないといじめられることになります。軍隊では、実行できても典範令に書かれている通り暗唱できなければ駄目なんです。

寝ている古参兵たちに煩がられるから、不寝番も押し殺した声で怒ります。拳骨で頬に一発ずつもらって解放されます。不寝番と言えば、こんなこともありまして。

「第二班初年兵、起きろッ！」の声に、また何かやらかしているかと、不寝番の前に整列しますと、「貴様たち、これでも掃除したのかッ！」と備え付けの痰壺を突き出します。中を見ると痰が浮いています。自分はおかしいなと思いました。それは今日の痰壺掃除は自分でしたのです。消灯前には、きちんと中也洗っ

てきれいにしておいたことは確かです。何のことはない、初年兵いじめに不寝番が自分で痰をいれておいてのことでした。こうして初年兵の一日が過ぎて遠い故郷の夢を結ぶのです。

帰隊しますと、初年兵にとっては戦場です。下士官の世話、食事の準備やらで休む暇もありません。ガタガタしているうちに一時間はあつと言う間に過ぎて、午後の教練のための整列準備がかかります。

午後の教練から帰ると、夕方の点呼までがまた大変です。下士官室に飛んで行く者、飯上げに行く者、編上靴の手入れ、小銃の手入れ、使役に出る者など、手足が幾つあっても足りないくらい初年兵は忙しいのです。夕方点呼のとき、我が班長の鬼軍曹殿は、墨黒々と「軍人精神涵養」と書いた木刀をもって来る。週番士官の点呼が終わると、班長が今日の教練成果について話すが、成果が悪いとただでさえ赤い顔が、ゆで蛸のように真っ赤になって怒る。教科についての質問をする。答えられないと木刀で頭にたちまちコブがでる。質問はほとんど初年兵が対象とされるのです。

教練等は敵しいのですが、休憩時などは大きな声を出して駄洒落を言い、愉快で思いやりのある班長でしたから、班長を悪く言う兵隊は一人としておらなかつた。班長が「解散！」を宣言して下士官室に引き上げると、初年兵係上等兵殿が「初年兵待てッ！ 貴様らは班長殿を困らせるのは、貴様たちがたるんだる証拠だ。足を開け、歯をくいしばれ」でサザエのような拳骨で片っ端からほったを思いきり殴るのです。その痛いこと、眼から火花がピカピカと光り散ります。「よしッ！ 作業にかかれ！」と言います。

点呼が終わると、班内の掃除、また下士官室の掃除と就寝準備、やり残しの編上靴の手入れなどがあります。早く取り掛からないと全部ができません。走り出そうとしますと、ベットのの上にあぐらをかいていた古参兵の一等兵が「初年兵さんよ、ちょっと俺の前に集まれ」と呼び止める。これがまた意地の悪い。初年兵は忙しいことを十分知っていて、だからだとお説教をするのです。自分たちはぶん殴られてもいい、早く作業にかかりたいと精神的苦痛に悩まされるのです。

ようやく解放されてバタバタと僅かの時間に始末をしなければなりません。

消灯ランプが鳴り響いてきます。「シンペイサンハカワイソウダネー マタネテナクノカヨー」「何をいつまでモタモタしているんだ。早く寝ろッ」と怒鳴られる。休む間もなく働き通しのうえ、怒鳴られ叱られ殴られて一日が終わります。

カチッと音がします。「第二班の初年兵！ 起きろッ」やっと疲れた体を横にしての寝入りばな、整列した自分たちを不寝番の古参兵が睨みつける。「貴様たちは、よくものうのうと寝られるもんだな。この銃は畏くも天皇陛下から授けられたものである。その銃の撃鉄が起きていた、ということはこの鉄はまだ今まで働いていたんだ。鉄を手入れした貴様たちの全員の責任だ。鉄に、あなたを働かせて自分は寝ていて申し訳ありませんでした、と謝れ」

#### 階級・敬礼

軍隊には階級があります。上は大将から二等兵まで

あります。まだ大將の上に元帥があります。そしてまた、その上に大元帥という階級が、大元帥の位は天皇陛下お一人のみです。元帥は特に功績のあった大將がなっていたようです。上から少将までが将官、少佐までが佐官、准尉までが尉官、そしてこれまでを将校と言いました。伍長まで下士官、二等兵までは兵士です。いわゆる兵隊さんです。

どんな社会でも階級制とか職級制などありますが、軍隊ほど階級について厳しいのは他にはなかった。「上官の命は朕が命と心得よ」で、絶対服従でした。一番ビリの初年兵の二等兵はほとんど全てのことには惨めなものでした。

あちらもこちらも身の回りは全部が上級者ですから、上級者に対しては敬礼をしなければなりません。内務班の中は家族と同様なので敬礼の省略を許されていますが、兵舎の外に出たときは全く困りました。

片手だけでは足りなくて両手で左右を見て敬礼しなければならぬほどでした。欠礼をしようものなら「コラッ！ その初年兵待てッ！」ハツと気付いて

敬礼してももう遅い「何中隊の何班の者だ。官姓名を名乗れ」とくる。「第一中隊第二班陸軍二等兵河村廣康であります」「ウン、貴様の中隊では上級者に敬礼せんでもよいと教育されているんか」「違います」「そうか教えられているんか、そんならなぜ敬礼せん」などといじめられます。用を足して班に戻ると、初年兵係上等兵が「河村！ ちょっと来いッ！」と睨みつけて呼び付けます。もう既に先程の欠礼の通報がきているのです。そこでまたこつてりと油を絞られます。

それぞれの部隊で違っていたでしょうが、私は入隊する前に「関東軍は軍律が厳しいぞ」と聞いていたのですが、一挙手、一投足いちいち文句をつけられていました。消灯後、幾度となく毛布を被って悔し涙を流したことが、今では、辛かったなあと思われられます。

軍隊は階級がものを言うところですが、同じ中隊内、同じ班内ですとこれが通らないところです。「軍隊は飯の数」とも言われています。上等兵が一等兵に文句を言われたり、将校が下士官に叱られたり、私的

制裁を受けたりしていたことは常識になっていました。「やい、伍長殿と奉っていればいい気になりやがって大きな面をするな。貴様、何年メンコ飯を食ってきたというんだ」と、任官ホヤホヤの若い伍長に一発かませるといふ光景はよく見かけました。

寝台の上に胡坐をかいた古参兵の一等兵が初年兵の自分たちを呼んで、「お前たちに、ガチャグツと言ふ歌を教えてやろう」とニヤリしながら、「ガチャグツ、ガチャグツ靴の音 出てみりゃ兵隊さんの演習帰り大尉に中尉に少尉殿ウ。特務曹長、曹長、軍曹、伍長、上等兵、一等兵、二等兵は可哀想だなあ」というんだ。他に上は同じだが「伍長勤務は生意気で 粹な上等兵にゃ金が無い 女迷わず二つ星イ」とも歌うんだ。

日曜日で古参兵は外出しておらず、作業もないとき初年兵が集まり、やけくその声を出して歌ったものです。

ああ、我が青春は

シベリア万年初年兵

—死ぬものか 必ず帰るぞ 日本へ—

愛知県 清田 信

昭和二十(一九四五)年五月、ハイラルから興安嶺に来て陣地構築。八月、攻撃して来たソ連の戦車隊と交戦。十五日停戦。チチハルに下って武装解除され、貨物列車に乗り出発、行先は分からない。隙間から吹き込む煙で手も顔も真っ黒になる。海が見えてきた。港へ行くぞ、日本に帰れるぞ。列車が止まる、皆我先にと顔を洗いに走る。意外にも水は塩からくない。だれかが叫んだ「バイカル湖だ」。

列車はシベリアを向いているのだ。一瞬皆は声もなくなり、話をする人もなくなった。そして我々はシベリア、クラスノヤルスクに到着。収容所には四方に銃を持った兵隊が立っていた。こうしてわれわれのシベ